
依存シンドローム

穂田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

依存シンドローム

【Nコード】

N6370K

【作者名】

穂田

【あらすじ】

暴力男に依存した女の話。

彼氏はよく殴った。

よく怒ったし、よく泣いたし、よく笑った。

笑ってる顔は好きだった。

泣いてる時は、どうしたらいいのか分からなかった。

怒った表情は見ないようにしてた。

ずっと一緒にいたかった。

殴られても蹴られても、どんなにひどいことされても一緒にいたかった。

秋空の下で穏やかな光が揺れる。手をこすり合わせ、寒さで赤くなった顔で見上げると、勇は少し笑って照れくさそうに手を繋いだ。

「夕御飯、何にする……？」

彼はマフラーに首を埋めながら、眉を寄せて思案を巡らせた。

「そうだなあ……鍋、とか？」

「何の？」

「うーん……」

「キムチ？」

「それはムリ」

勇は辛いものが苦手だった。私がくすくすと笑うと彼は軽く頭を小突いた。

勇は白いマフラーを首に巻いて、手袋は血の気がない私の手にはめられていた。

私の手から肘^{ひじ}にかけてには、真っ白な包帯が巻かれている。ようやく今日、骨を固定するための型が外されたのだった。そのために病院に行った帰りだ。

腕が折れたとき、勇は本当に心配してくれた。泣きそうな顔で「大丈夫？ 痛い？」と何度も聞いた。折ったのは彼だったけれど。

私は彼の横顔を眺めた。

優しくそれで柔和な顔つきだ。近所付き合いも良好で、ご近所の主婦たちからの人気は高い。そんな彼の隣にいられるのが、何よりも嬉しい。

「ねえ、幸恵。明日、どっか行こうか」

「どっか？」

彼が自分から外出したがるのは滅多にない。私の怪訝な視線に気付いたのだろう。勇は困ったように微笑んだ。

「幸恵には苦勞かけてばかりだから、何かお返しがしたいんだ」

申し訳なさそうに言う言葉に、私は「そんなことないよ」と首を振った。

充分すぎるほど彼にはよくしてもらっている。本当なら私がお返ししなければならぬのだ。

並木道を勇と一緒にゆっくりと歩きながら、幸恵はふと思いついた。

——そうだ。私ができることといえば……。

随分と前から考えていたことだ。実行するのにこんなに良い機会はない。

ちようど腕も治ってきた頃だ。また新しく怪我をする前にサプライズをプレゼントするのもいいかもしれない。

幸恵はにっこりと微笑んだ。

「明日は私が何かおいしいもの作るね」

そう言っておけば、少なくとも腕を傷つけられることがないことを、彼女はよく知っていた。

勇の性格は、良い意味でも悪い意味でも熟知していた。

肉の焼ける良い匂いで勇は目覚めた。そういえば彼女がご馳走を作るというて、昨日の晩張り切っていた。

知らず知らずのうちに口元には笑みが浮かんでいた。自分には出来過ぎた恋人だ。家事も炊事もそつなくこなす。文句一つ言われた

ことがない。

——いや……一回だけある。

帰りがいつもより遅かったときに「浮気してるんでしよう!」とすごい剣幕で怒鳴られたことがある。ついカッとなって家を出て行ってしまったが、次の日に帰ったときには幸恵はいつもと何ら変わりなかった。

大きな欠伸^{あくび}をして、寝室のドアを開ける。幸恵は「おはよう」と笑顔で言った。

「もう昼過ぎだよ」

口を尖らせる幸恵の肩を抱く。笑いながら幸恵は身をよじらせた。

「もうできるから座って待ってて」

「わかった」

おとなしく待っていると、目の前には次々に豪勢な料理が並んだ。

「いただきます」

「召し上がれ」

幸恵はうきうきとして勇の反応を待っていた。最初に食べてとすすめられたスペアリブに噛み付く。口の中にスパイシーな香りが広がった。

「どう?」

「おいしいよ」

「よかった」

アザだらけの顔で彼女は綺麗に笑った。

「これはどうしても最初に食べてもらいたかったの」

「一番の自信作か？」

自分の幸せを噛みしめながら、勇は訊く。
まあね、と曖昧に幸恵が答えた。

「最初に食べてもらわなきゃ困るの……」

その呟きに勇は首を傾げる。

幸恵は相変わらず文句のつけようのない笑顔だった。

「だって——あなたには早く死んでほしいんだもの」

「さち……」

口から血を吐いた勇を——彼女は冷たく見下ろしていた。

——死んでもらわなきゃ困るの。

彼氏はよく殴った。

よく怒ったし、よく泣いたし、よく笑った。

笑ってる顔は本当は嫌いだった。

泣いてる時は、どうしたらいいのかわからないフリをした。
怒った表情は見ないようにしてた。

彼が死ぬまで――ずっと一緒にいなければならなかった。

殴られても蹴られても、どんなにひどいことされても一緒にいなければならなかった。

幸恵はこと切れた勇を見下ろす。
これまでのことが走馬灯のように頭の中を駆け巡った。

「ごめんね、幸恵」

勇を見下ろす女の名前は『絹恵』だった。

絹恵と幸恵。瓜二つの双子の姉妹だった。

ある夜、幸恵から電話で呼び出された絹恵は、幸恵が勇と同居するこの部屋で変わり果てた妹の姿を見た。全身アザだらけで明らかに継続的に暴行された痕があった。

妹の亡骸を見て、絹恵は復讐だけを心の支えに生きてきた。

翌日、何食わぬ顔で帰ってきた男を、絹恵は温かく迎えた。

たかが「浮気してるんでしょ！」という一言で、激情のままに妹を殴り殺した男。

そんなやつを許せるわけがない。

清々しいような表情で絹恵は天井を見上げる。もともと整っている顔は、そのときは一段と綺麗だった。

「もう泣かないで——幸恵」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6370k/>

依存シンドローム

2010年10月21日22時22分発行